

日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第94号 (2023年9月1日号)

発行者 〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1 近畿大学経営学部高橋路子研究室
日本ハーディ協会 jimu.thsjapan@gmail.com
編集者 金谷益道 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学



ハーディの心臓が眠る St Michael's Church (2022年7月編集者撮影)

ハーディ経由の森鷗外

清宮 倫子

英文学を学ぶとはどういうことなのか、この頃しきりに考える。英語の意味がスッと頭に入ってこない。外つ国の言葉なのだから当然なのだが、知力も感性も駆使して分かれようと努めると頭の芯

が疲れる。あるとき良い日本語の文章を読むと、リラックス効果があることに気付いた。良い日本語といってもいろいろあるが、私の場合は森鷗外であった。

初めは長いものは研究のさまたげになるので避けるつもりで、比較的短い作品が多いので選んだ。頭にも心にも安らぎをもたらしてくれた。静謐というのだろうか。何かつかしい気がした。そのうち洋書の読書はそちのけになって、朝起きると今日は鷗外の何を読もうかとワクワクするようになってしまった。

大江健三郎も谷崎潤一郎も夏目漱石もこうはいかなかった。鷗外の何が気に入ったのか、それは文体だと先ほど書いたが、文は人なりというから、たぶんこの人自身が気に入っているであろう。この人は偉大な文学者であるが医者でもあった。自然科学を知っていた。たぶんこのあたりであろう。19世紀末は、自然科学が猛威をふるった時代だ。ダーウィニズムはその一部に過ぎない。この問題に対峙していないと感じると、何か安心できないのである。

鷗外は1884年から1888年の4年間、陸軍から軍医として主に衛生制度研究のためドイツに留学を命ぜられた。ハーディが『カスターブリッジの市長』とか『森林地の人びと』を発表していた頃である。彼は当地で、医学だけではなく同時代の文学を学んで日本近代文学史に大いなる足跡を残した。しかし、医者としてのキャリアは捨てず陸軍軍医の最高峰まで上り詰めた。いわば良い意味での「二足の草鞋」を履きこなしたのである。そのため売文を職業としなくてもよい作家として、大衆読者におもねるといことがなかった。ここも鷗外の大きな魅力となっている。

『雁』を読んだ時には、偶然をとりこむプロットや、主人公お玉の人物造形がハーディによく似ていることに気づいた。『麻醉』には、「人間はmilieuの威力には抗し難いものと見える」などとハーディみ似たことを書いている。『牛鍋』では、「人は猿より進化してゐる。」と繰り返し、『半日』という私小説的な作品でさえ「遺伝」にふれている。また、安井夫人や桂屋太郎兵衛けなげの健気な子供たち（『最後の一句』）は、ハーディだったら pure と言いたい人物たちだと思われる。彼らが素樸な物語の中で、何といきいきと描かれていることか。

鷗外が日本の早稻田派の自然主義文学を批判したことは、教科書的知識であるからここでふれない。私が興味をもったのは、ゾラの「実験小説論」を彼がどう批評しているかであった。「実験小説論」は、クロード・ベルナルという医者フエロの「実験医学序説」に全面的に依拠しているので、彼がこれを読んでいないことは考えられない。果たして、「エミル、ゾラが没理想」というエッセイで鷗外がこれを論じているのを読んで驚いた。ゾラの議論と作品の間にギャップがあるという、その目のつけどころがハーディの唯一の小説論ともいえる「小説の科学」に述べられていることに極めて似通っているのだ。さらに、ゾラもハーディも批判する copyism を、鷗外は光写図フォトグラフィと言い換えて、「作者はこれにて足れりとすべきにあらず。」（「医学の説より出たる小説論」）と断じる。また、『沈黙の塔』に「『危険な書物を読む奴を殺すのです。』『どんな本ですか。』『自然主義と社会主義との本です。』『変な取り合わせですなあ。』』という会話がある。鷗外は、ゾラの作品に社会主義思想が含意されているのを知っていたのだろうか。

「土地勘」と言うものがある。知っている町を歩くような楽しさである。鷗外には、ミソジニイの雰囲気があるが、もっと優しくて深い人間への洞察があるところもハーディによく似ていると思う。しかし、これをテーマにして論文を書こうなどとは夢にも思わない。鷗外とハーディに影響関係はない。鷗外の書いたものにハーディの名はない。影響関係がないのだから、論文にはならない。evidence を出せと言われても困るのだ。同じ時代の空気を吸っていた鷗外とハーディの affinity を、

成人してからのほとんどの学習時間を、英文学とそこから入った自然科学と文学の関係を考えながらすごしてしまった私を感じたというだけの話である。

思えば、小学校に上がる前、『安寿と厨子王』という絵本を読んで、衝撃を受けた。親子を離別させ、子供は売られ、母は年老い盲目となって再登場する。「安寿恋しやほうやれほ。厨子王恋しやほうやれほ」。今でも覚えている。高校の国語の教科書に『高瀬舟』が載っていた。大学で『舞姫』の感想文が宿題に出た。学校で文学を教わると、正解が有って、それが自分には分からないのだという印象をもってしまう。それで、面白くなくなった。しかし今、鵑外を楽しんでいる私は、良い鉱脈を掘り下げると思いがけないところにつながると知って、安心した。

一隅を照らす

風間 末起子

先日、中学時代の旧友からメールが届いた。当時のクラス担任だった英語の先生を囲んで数名で食事会を開いたそうだ。メール文の最後に「A先生と出会えたことは幸運だったと思います。一隅を照らすという言葉がありますが、先生はまさにそういう方であったと思います」と記されていた。

私はこの言葉になぜか強く惹かれた。あの頃大学を卒業したばかりの24歳の先生を思い出していた。中学2年の、14歳の、複雑にして単純な子どもをどう扱ってよいのか戸惑っている、困ったような先生の眼差しの奥に、愛の欠片を感じ取っていた自分のことも思い出していた。先生の心を感じていたのに、その思いを先生に伝えることなど無理だったことも。

さてここでハーディに移りたい。

ここ20年ぐらいは、小説の中のマイナーな端役に注目して研究をしている。乾いた雑巾からは水滴が出てこないように、私の力量不足から研究に行き詰まったせいだが、結果的にハーディの筆の冴えが短いページに凝縮されていることを知るきっかけになった。

まずスーザン・ヘンチャードである（『カスターブリッジの町長』1886）。彼女は存在感のうすさ故に却って興味を引く人物かもしれない。酒の席の座興とは言え、夫ヘンチャードが水夫に自分を売り飛ばしたから、女兒の死を秘密にしてきっちり復讐を遂げている。青白い顔をした無口で没個性の女は、水夫との間にできた娘エリザベス・ジェインの幸福のみに没頭するビクトリアン・マザーである。だが、スーザンには死後に威厳が与えられている。カクソム婆さんがスーザンの臨終の言葉を町の人々に伝えているからだ。これは冷遇され続けた女の一生を償うものになっている。

「私が運び出されたらすぐに窓を開けてください。エリザベス・ジェインのためにできるだけ明るくしてあげてください」（18章）には、生き続けよとの娘への愛が溢れている。一方、スーザンの臉の上に載せた銅貨は遺言通りに庭に埋められるが、クリストファー・コニーが酒代に使ってしまうから、却ってスーザンは町の人々の記憶に生き続けることになる。死者に敬意を示さない夫ヘンチャードには引出しの手紙が待っている。彼の鼻先には家族の秘密が突きつけられて、スーザンの見事な復讐行為となる。こうしてスーザンは、過去、現在、未来という連続性の中にしっかりと根を張る人物に仕上げられている。

もう一人の母親は『帰郷』（1878）のヨーブライト夫人である。夫人には、スーザンとは比べものにならないほどの存在感がある。夫人はいつも威厳があり、その上いつも怒っている。息子クリムの現実離れた教育計画に対して、高飛車で反抗的なユーステイシアを息子が選んだことに対して、またある時は、和解しようと寛大な気持ちになったのに家の扉を開けようとしない息子夫婦に対して、とにかくヨーブライト夫人は火のように怒っている。だから夫人が歩く荒野にはアダムとエバの原罪と異教の魔女が跳梁する。それでも、疲弊した夫人が荒野で息子に出会った時には以心伝心で和解したはずだが、ギリシア悲劇のコロスのように、少年が夫人の怒りを暴露している。「おばちゃんは息子に捨てられ胸をかきむしられたって」（4部8章）。『リア王』、『創世記』、鉄槌を受けた魔女、こうした引喩を総動員させて、ヨーブライト夫人の荒野のエピソードを描いているのは、人間の本質や属性をあぶり出すためであろうし、私たちに内省を促してくれる。

端役の若い娘としては、『はるか群衆を離れて』（1874）のファニー・ロビンと、『森に住む人々』（1887）のマーティ・サウスを挙げたい。ファニーは恋人トロイに捨てられた典型的な堕ちた女であるし、体も心も弱い女で、死後もスーザンのように村人の伝聞によって語られる女である。ところが、嫉妬に狂うバスシバが棺をこじ開けて、遺体の赤ん坊とファニーを目撃した途端に、バスシバはファニーの無言の仕返しを感じ取り、女の苦悩に参加（共感）することになる。「狂気を帯びたバスシバの想像力の中では、この巡り会いは、ファニーの失敗を成功に、屈辱を勝利に、不運を優勢に逆転させた」（43章）。バスシバは自分の強さゆえにファニーに光を与える役目を果たしたことになる。

最後にマーティのことを少しだけ書き添えておこう。読者は脱俗的で孤独なマーティには複雑な思いを抱くだろう。片思いのジャイルズの墓前で血を吐くような彼女の独白は特にそうだ。寓意としてのマーティの存在に、安定の象徴だけでなく、ヒントック村の不安定要素も察知するが、一条の光が彼女に照らされていることも否定できない。継続する愛、継承される仕事、持続する記憶など、マーティの営為には明らかに尊厳が与えられている。だが崇高さの代償に伴うものも私たちは知っている。

こうした人物たちにハーディが集中するのはごく限られた場面であるが、片隅を照らす人物として忘れがたい。そういう人物に、私たちが憧れをいただくからであろうか。

トマス・ハーディとジョルジュ・サンド

杉村 醇子

作家として世に出ることを望むトマス・ハーディに、レズリー・スティーヴンは過去の偉大な作品に学ぶことは推奨するが、独創性を守るため、作家は批評を参考にすべきではないと助言する。しかし同時にスティーヴンは、参照に値する批評家としてマシュー・アーノルドの名を挙げる。実際ハーディはアーノルドとも深い親交を結んだが、ハーディをとりまくこの二人の文学者は共に、同時代の一人のフランス人作家に関心をよせた事実は注目されてもよいだろう。

今日、「芸術のための芸術」を主張したフローベール、あるいは20世紀を代表する小説『失われた時を求めて』を記したプルースト等、他のフランスの作家と比べ、ジョルジュ・サンドの作品が

高く評価されることは稀である。しかし 19 世紀の一時期、英国におけるサンドの影響力は絶大であった。ポール・G・ブランドはその著書 *George Sand and the Victorian World* (1979) において、革新的な作風に批判の声があがる一方、ジョージ・エリオット、ジェーン・カーライル、エリザベス・バレット・ブラウニング、シャーロット・ブロンテらがこぞって書簡でサンドの作品に言及する等、ヴィクトリア朝の文壇にはサンドに対する「熱狂」が存在したと述べる。さらにブランドは 19 世紀の男性作家の中で群を抜いて彼女に惹かれた人物はアーノルドと指摘し、アーノルドはその深い内面性や雄弁な文体に加えて、自然に対する繊細な表象にも感銘を受けたと語る。

スティーヴンもまた、アーノルドが傾倒したサンド文学に関心を示した。彼は後に二番目の妻となるジュリア・ダックワースと関係を深める中、二人で読書録を記したが、そこにはサンドの小説群が含まれていた。興味深いことに、彼はサンドの思想や作品に対して、批判と肯定という対照的な態度を示している。スティーヴンは彼女が時折見せる愛国的な姿勢に反感を抱き、またフランスの作家たちの性的な描写は総じて直截的とみなした上で、サンドの作品も「好色で淫らな」傾向を持つと、政治思想と道徳の点から非難する。しかし否定的な見解を下す一方、スティーヴンはサンド作品固有の様式美や叙情性を高く評価している。彼は、曾祖父の代から始まる家族史を含む長大な自伝『我が生涯の記』(*Histoire de ma vie* 1855) を「私が読んだ中で最高の自伝文学」と称賛する。またフランス中部のベリー地方を舞台として、パストラルの系譜に連なる「田園四部作」の四作目『笛師のむれ』(*Les Maîtres sonneurs* 1853) を「ほとんど完璧な文学作品」と評し、賛辞を惜しまない。そしてハーディに本作を推奨するスティーヴンは、サンドと同様の世界を描くことができると彼を励まし、彼女の作品が持つ「調和と優美さ」を目指すべきと助言する。このように身近な二人が評価したサンド文学をハーディはどのように受容したのだろうか。

George Sand and the Victorians (1977) を記したパトリシア・トムソンは、サンドとハーディは作中における田園の使用法が酷似し、ハーディは多くの着想をサンドの作品から得たと述べる。そしてトムソンは、ヴァレ・ノワールとウェセックスを舞台とする両者は、田園を無限に広がる空間に発展させ、それぞれの農村の精緻な描写は宇宙的な思想を表出すると、思想面での近似性も言及する。確かにハーディは、アーノルドが礼賛しスティーヴンが参考にしよう助言した、美しい田園を描き出すサンドの手腕だけでなく、その思想にも心を寄せていた。作家の影響関係を知る手掛かりとなる *Literary Notebooks* には、1876 年に記されたサンドの『モープラ』(*Mauprat* 1837) に関する項目が複数含まれており、ハーディは彼女が作中示した教育の有用性や博愛主義に着目したことが分かる。ハーディのこの関心は決して激しいものではなかったが、生涯を通して途絶えることはない。1899 年、フランスの雑誌社から評価する同国の作家を問われた彼は、自身のフランス文学の知識は限定的と断った上で、回答としてルソーやバルザック等と共にサンドの名を挙げ、その作品は優れてフランス的であり、独創性を持つと特色を語る。ここで重要なことは、先に述べたサンド作品への「熱狂」は、執筆活動と同時期にピークを迎え、19 世紀後半になるにつれ、過剰な理想主義等が批判的的となり、その評価が急落する点である。しかしハーディは歳月を経ても、彼女への関心を絶やすことはない。1912 年 6 月、ヘンリー・ニューボルトと W・B・イエイツはマックス・ゲイトを訪れ、ハーディに王立文学協会のメダルを授与する。その際、詩の不滅性を訴える 72 歳の老詩人は、自身の考えはサンドの言葉によって代弁されうるとして、彼女の『アンドレ』(*André* 1835) からの長文の一節を用いてスピーチを締めくくる。また 1922 年刊行の *Late Lyrics and Earlier* に収められた 'An Ancient to Ancients' において、語り手たる老人は過去を振り返り、若い時に親しんだ彼女の作品を懐かしむ。ハーディにとって、サンドは思想体系を覆すほどの衝撃を与えた存在

ではない。しかし、親しく交友したアーノルドが傾倒し、スティーヴンから参照するよう助言された青年時代から晩年に至るまで、作品の評価が逆転しても、ささやかな関心を絶やすことなく持ち続けた。世論が変化する中、消えることのない小さな灯火のように約 50 年に渡り心を寄せたことを考えると、サンドはハーディの創作に一つの影響を与えた作家と言えるのではないだろうか。

ガブリエル・オウクは地面に落ちたベーコンを食べるのか？ —— 『汚穢と禁忌』から照射するハーディ作品

土屋 結城

今回、原稿の依頼をいただき何について書こうか思案したが、『ハーディ研究』第 47 号に掲載いただいた論文に端を発する、ある体験について書こうと思う。その論文では、『はるか群衆を離れて』を、人類学者メアリ・ダグラスの『汚穢と禁忌』を補助線として読み解くことを試みた。『汚穢と禁忌』は、訳者塚本利明の言葉を借りると、「まず、文明社会の一例としてトマス・ハーディの小説中にみられる『よごれ』の観念から出発して」(399)、宗教的な儀式における、あるいは共同体における穢れの意味、役割について考察した著作である。この著作で「まず」取り上げられるハーディの小説が『はるか群衆を離れて』であり、ダグラスは、「汚れの規範を無視することによって逆に友情を表現することができる」例として、ガブリエル・オウクがウェザーベリーのモルトハウスで汚れたコップに注がれたリンゴ酒を勧められたときのやり取りを引用しているのだ(43; なお、ちくま学芸文庫から出版されている『汚穢と禁忌』の訳では「ガブリエル」と表記されているため、以下、本稿ではガブリエルと表記する)。

昨秋、その『汚穢と禁忌』について、医療人類学者の磯野真穂さんがオンラインで 10 週にわたる講座を開催すると知り、いそいそと参加を申し込んだ。私が参加した講座は、毎週金曜日夜 8 時から 90 分×10 週。講座後には、受講者がレビューを提出することができたのだが、呪術についての説明を聞いては「トマス・ハーディの『帰郷』という作品を思い出します」と書いたり、「ピュアという語を聞くと、トマス・ハーディの『テス』という作品を連想します」と書いていた私のコメントは受講生の中で異彩を放っていたようで、ほどなく磯野さんから連絡をいただいた。ハーディの専門家がいるとはなんとという僥倖、というお言葉とともに、講座参加メンバー(含過去の参加者)を対象として、不定期に開催する交流会で話をしてくれないかとの依頼を受け、私にとっても面白い経験になりそうな予感がしたので、二つ返事で引き受けた。

打ち合わせの結果、交流会タイトルは「ガブリエルはいい人か？テスは果たしてピュアなのか？—土屋結城、トマス・ハーディを語る」と決まり、忘年会を兼ねて 12 月 29 日にオンラインでハーディについて語ることになった。

そして当日、Zoom の入室者の顔ぶれを見渡していた私は思わず絶句してしまった。参加者の中に石井有希子さんがいらっしまったのだ(後で伺うと、磯野さんと面識があり、過去に別の講座に参加されたことがあるとのことだった)。ということで、要所で石井さんの助けを得ながら、ハーディについて、『テス』について、『はるか群衆を離れて』について解説した。

『テス』についてはあらすじをおおまかに説明しただけだが、配信サービス等で映画をご覧になった方もおり、高い関心が寄せられた。チャットには続々と「エンジェル、ひどい」、「いや、アレックの方がひどい」との感想が書きこまれ、また、医療関係者が多い会ゆえか、アレックが刺された際には血液が階下にまで流れ落ちたという描写が波紋を呼び、さらに石井さんの適切な解説により、テスの行為はヴァージニティを取り戻すためだったのかといったコメントまでいただいた。

そんな中、私が最も盛り上がったと思うトピックは、「果たしてガブリエル・オウクは地面に落ちたベーコンを食べるのか？」である。『汚穢と禁忌』では、オウクが汚れたコップからリンゴ酒を飲んだ行為は、以下のように解説されている。「リンゴ酒をご馳走になるのにきれいなコップはいらぬという羊飼いが登場するが、農場で働いている労働者はこの男を『やかまし屋でないすてきな男』だといって誉めるのだ」(43)。

交流会では、この場面でのオウクのセリフ「あっしはただの汚れなんぞは全然気にしません。特にどんな汚れかわかっていればなおさらでさあ」(“I never fuss about dirt in its pure state and when I know what sort it is.”)を取り上げ、いくつかの疑問を提示した。オウクは“dirt in its pure state”なら気にしないと言っているが、そもそも“pure state”にある汚れとはどのようなものなのか？ 汚れを気にしないと言っているが、「どんな汚れかわかっていれば」という条件がついているのでは？ しかも、このコップは実は「内側や縁は明らかにきれい」(ハーディ 56)だと書かれているが？ などなど。さらに石井さんからは、『汚穢と禁忌』では「すてき」と訳されている“sensible”の意味について、より英語に即すと「ものをわかっている」のような意味で、オウクが共同体の内部の「汚れ」を許容したことが重要な意味を持つのではないかと指摘もいただいた。

これらの議論を踏まえ、小説の続きにある、店主の次のセリフについて考えてみた。「それで、農場の奥さんが差し入れてくれたパンとベーコンもあるんじゃないよ。(中略) じゃが、あんた、ようかまん方がええよ。持ってくる途中で、ベーコンを道に落としたもんじゃないけえ、砂が入るとるかもしれん。それでも、きれいな汚れじゃ。あんたが言うように、出所の知れたもんじゃないで。」(ハーディ 57) 汚れたコップに注がれたリンゴ酒は飲むことができたオウク、果たして地面に落ちたベーコンを食べることができるのか？

盛況のうちに会は終わったが、交流会の興奮冷めやらぬ中、石井さんとメールでやり取りした際にいただいたお言葉、「あんな風に文学に接するの新鮮でいいですね」がすべてを物語っているように思う。このような機会にこそ、普段わかった気になってやり過ごしている疑問と向き合うことができる。私にとっても、まさに「新鮮」な体験をさせてもらった会であった。

引用文献

ダグラス、メアリ 『汚穢と禁忌』 塚本利明訳、筑摩書房、2015。

ハーディ、トマス 『トマス・ハーディ全集 4 はるか群衆をはなれて』 清水伊津代、風間末起子、松井豊次訳、大阪教育図書、2020。

The Well-Beloved (『恋の霊』) 翻訳の経緯

南 協子

この度、トマス・ハーディ作『恋の霊—ある気質の描写』の翻訳本を上梓した。その後、協会ニュースの原稿の依頼を頂いたので、なぜ私のような若輩者が翻訳の機会を頂いたのか、数あるハーディ作品の中でなぜこの作品を選んだのかなど、出版されるまでの出来事を時系列でお話しさせて頂くことにする。

まず、出版のきっかけについて。10年ほど前には私は Facebook にアカウント登録したものの、特に友人達に書き知らせるような事もない日々を送っていた。せっかくならば今まで文学に興味が無かった一般の方々にイギリス文学の豊かさを伝え、興味を持つ人が増えてほしいと、イギリス文学史に出てくるよく知られた作品をエッセイにして書くようになった。まだ大学院を出て間も無く、不勉強が透けて見えるし、文章力という点でも修行が必要なことを自覚させられる経験だったが、作品の魅力や楽しさが伝わるように心がけて数年以上続けた。

Facebook は主に知り合い同士で繋がるツールであるが、全く知らない人とも繋がることもできる。面識のない人からのフレンド申請を受け入れると、その人の知人が私のことを知るきっかけとなり、さらに知り合いの輪が広がっていく。私はよほど怪しい人で無い限り申請を受け入れていたので、続けていくうちに Facebook 上の知人が数百人以上にもなった。どの繋がりか定かではないが、私の投稿にたまたま目に留めてメールでご連絡を下さり、翻訳の話を持ちかけて下さったのが、幻戯書房の編集者である中村健太郎氏である。幻戯書房とは、角川書店の創業者である角川源義の娘である辺見じゅんが設立した出版社で、海外文学を扱う「ルリユール叢書」を擁する。

初めての出版で右も左も分からなかったが、言われるままに翻訳する本を選び企画書を出した。なぜ『恋の霊』を選んだのかというと、この作品が、中村氏からの指定である短かすぎず長すぎない作品のうち、私にとって最も興味深い作品に思えたからである。ご存知のようにハーディは渾身の自信作である『テス』や『ジュード』を理解できない読者の酷評により小説界から離れる事になったが、その後に出された最後の小説『恋の霊』は、ヴィクトリア朝最後の小説家と言われるハーディがモダニズムに最も近づいた作品とも言える。もちろん、藤井繁や前田淑江などの先生方の優れた邦訳がすでにあるのに、自分の拙訳を出すのは厚かましいと感じたが、若輩であるからこそ、これからを生きるデジタル世代や令和世代にも伝わる言葉を紡げるかもしれないと感じた。

数年間は年1回ほど進捗を尋ねる連絡が来て、そのうち出版までの大まかなスケジュールが提示された。その間、中村氏はつかず離れずといった距離感で、催促も、こうしてほしいという注文もほとんど無く忘れられたかと不安になるほどであったが、こちらが質問を投げかけると早々に丁寧な返答が来る。例えば、どのような読者を想定しているのかという質問には、解題は研究者も納得できる論文レベルのものを望んでいるが、主として一般の海外文学ファンを想定しているという。

翻訳で特に気を使ったのは一人称と二人称の訳である。例えば、主人公ピアストンが同年代のアヴィシー1世との会話に使う“I”は「僕」が自然だが、大きく歳が離れている3世との会話では「私」が良いであろう。では、2世との会話ではどうであろうか。知り合って間もない間柄では「私」だが、親密になりたい時は「僕」になるのではないだろうか。また、教養がある1世と3世は、自分の事を「私」と言うだろうが、貧しく教育を受けていない2世は「あたし」と言うだろう。2世が

ピアストンを呼ぶ時の“**You**”は「旦那様」と訳した方が自然だろうし、逆にピアストンが2世を呼ぶ時は「君」だろう。では、ピアストンが1世や3世を呼ぶ時は「あなた」と「君」のどちらが良いただろう。階級や性格や二人の関係等、様々な要素を考慮して選ばなくてはならなかった。

そこから何年もかかって何とか形にすることができたのが一昨年になる。そして1年かけて直しの作業に入った。最後の数回は、中村氏から提案が入る。例えば、火を「起こす」を「熾す^{おこ}」にしてはどうか等、細かい言葉の使い分けを提案してくださり、おかげで文章に格調が添えられた。また、「気付く」「気づく」といった表記揺れの統一も厳密に行って下さり、文章を商品にするには傷無く磨き上げる必要があるのだと知った。全ての文章に目を通して助言をくれた母清宮倫子にも頭が上らない。中村氏は、組版を自ら組んで校正をなさっているので、普通だったら断られるような、校了ぎりぎりでの行数が変わってしまうような直しのお願ひも受けて下さり、ありがたいと同時に申し訳なく思った。

本文以外のことは中村氏にお任せした結果、実に見目麗しい本にして頂いた。ルリユール叢書は、眺めるだけで癒されるような配色のカラフルな装丁が特長である。それは、文中にある色から中村氏が選び、専門デザイナーが作成している。『恋の霊』からは、三人のアヴィシーの髪と目の「ハシバミ色」、アヴィシー2世^{みやび}が着ていた服の「赤紫色」、夕霧の「鉛色」の三色が採用された。どれもニュアンスのある色で雅である。近年は、Kindleなど嵩張らない電子書籍で買いたい読者が多く、紙の本を買ってもらうには美しい装丁が必要となる。さらに、ハーディの年譜に、同じ年に起きた歴史的な事件や重要な著作が付記されているのも中村氏の案で、ひとつの作品を読んだ後にそこで終わりにならず、次々と読む作品を見つけてほしいという願ひが込められているようだ。

出版後も、いろいろな方々にお世話になり通しだった。出版して数ヶ月後に「図書新聞」に、翻訳家の西崎さとみ氏が丁寧に好意的な書評を書いて下さった。さらに、ルリユール叢書の公式Twitterで発売の宣伝をして頂き、読者の方々のリツイートや感想を頂いた。勝手ながら日本ハーディ協会の先生方にもご所属の大学やお住まいの地域の図書館に取り入れて頂くようお願いをした。私自らも地元で申請すると既に入っており、借りるまで順番待ちであるという。私が大学に入った頃、もう世間では文学離れが叫ばれており、文学部が次々と削られていくのを目の当たりにしてきたことから、私は、一般の海外文学ファンというのは実在せず、実際に本書を所望する人は一人もいないのではと危惧していたので嬉しかった。

私が出版の機会を頂いたのは単なる幸運であり、未熟ながら形にできたのは上記のように多くの周りの皆様のおかげである。まだまだ勉強不足な身ゆえ、内容に誤謬、誤解、誤訳などあればご指摘頂きたいと思っている。

《日本ハーディ協会大会 特別講演》

ウィリアム・モリスとトマス・ハーディ

古建築物保護協会への関与をめぐって

日本女子大学 名誉教授 川端 康雄

ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) とトマス・ハーディは直接の面識はなかったと思われるが、『ダーバヴィル家のテス』の著者贈呈を受けたモリスの礼状が残っていて、そのなかで『はるか群衆を離れて』と『帰郷』を以前に読み自然描写に感銘を受けた次第をハーディに伝えている (1891年12月15日付)。ハーディのほうはモリス没後にマッケイルの伝記を読み“*What a strenuous character Morris’s was!*”と感想を記している。

注目すべき二人の接点として、1877年発足の古建築物保護協会 (The Society for the Protection of the Ancient Buildings; SPAB) での活動がある。モリスはこの協会の設立者にして運動のリーダーだった。当時英国内で大規模に行われていた古建築 (特にゴシック様式の教会建築) の「修復」 (restoration) という名目での破壊行為に憂慮して、ギルバート・スコット (Gilbert Scott, 1811-78) を筆頭とするゴシック・リヴァイヴアルの「修復建築家」たちの恣意的な変更に建築物を守ることがめざして立ち上げた組織だった。ハーディは建築家としての活動期に教会修復に従事したのだが、1870年代初頭に建築家から作家に転じて、自身が関与した修復の内実に批判的な目を持つようになる。じっさい、1881年に彼はSPABの趣旨に賛同して入会、ウィンボーン・ミンスターへの修復計画への反対運動を手始めとして、ドーセットを拠点にして同協会の活動に協力を惜しかなかった。SPABの1906年の年次総会で読まれた講演「教会修復の思い出」 (Memories of Church Restoration) は、ハーディの若き日の建築家修行時代とSPABへの協力の経験が生かされていて、深刻かつユーモラスなエピソードに富み、たいへん味わい深い。そこで示されている古建築物についての見解はモリスのそれと響きあう部分が多くある。本特別講演ではこのテキストをモリスのSPAB関連の発言と対照させつつ、両者の建築、芸術、歴史の見方を考察してみたい。付随的に、モリスとハーディの双方に (時期を異にしながらも) 深く関わったシドニー・コッカレル (Sydney Cockerell, 1867-1962) の仕事にも言及することになるだろう。

《日本ハーディ協会大会 研究発表》

‘So, Time’: Thomas Hardy’s ‘Bending-Ocean’ and Albert Einstein’s Theory of Relativity

Neil Addison
Professor Japan Women’s University

As various scholars have noted, Thomas Hardy's later poetry contains several references to relativity (Schweik 60; Henschman 232). This reflects Hardy's keen reading of Albert Einstein's theory of relativity during the early 1920s (Björk 544). But Hardy's imaginative representation of time and space as relative also echoes his earlier poetic work. In 'An August Midnight' (1901), Hardy challenged the notion of an objective reality, accentuating the strangeness of creatures' relative spatial perspectives, while his later 'Drinking Song' (1928), referred to reality as 'a sort of bending-ocean' (Hardy 70). Further, in 'In a Museum' (1917), Hardy addressed the hopeful possibility that the past could continually exist while in 'The Absolute Explains' and 'So, Time' (1925), he appeared to align his understanding of Einsteinian spacetime with his own perceptions of a living past. This paper will therefore discuss how Hardy's representation of Einstein's relativity illustrates his broader treatment of the concept of time.

Bibliography

- Björk, Lennart A., editor. *The Literary Notebooks of Thomas Hardy: Volume 2*. Macmillan, 1985.
Hardy, Thomas. *The Complete Poetical Works of Thomas Hardy: I*. Edited by Samuel Hynes, Oxford UP, 1982.
Henschman, Anna. *The Starry Sky Within: Astronomy and the Reach of the Mind in Victorian Literature*. Oxford UP, 2014.
Schweik, Robert. "The Influence of Religion, Science, and Philosophy on Hardy's Writings." *The Cambridge Companion to Thomas Hardy*, 3rd ed., edited by Dale Kramer, Cambridge UP, 2005, pp. 54-72.

《第1回 19世紀イギリス文学合同研究会 シンポジウム》

19世紀イギリス文学における同性間の交流とコミュニケーション

司会・講師	名古屋学院大学	西村 美保
講師	同志社大学	玉井 史絵
講師	松山大学	矢次 綾
講師	群馬大学	金田 仁秀

communication は「分かち合う」を意味するラテン語の *communicāre* を語源とする。19世紀は、ペニーポストの導入や帝国全土に広がる電信網の敷設など、コミュニケーション技術が飛躍的に進歩した時代であった。本シンポジウムでは、そのような時代である19世紀に人と人との意思疎通と関係性の構築がいかに表象されたかを、ディケンズ、ギャスケル、ハーディ、ワイルドの4人の作家やその周辺のヴィクトリア朝の作家を念頭に置きながら検討していく。

講師はそれぞれの角度から同性間・階級間・世代間など、様々な登場人物の交流がどのように描かれているのかを明らかにしていく。人々の交流から構築されるものとしては、友愛や互助精神、欲望、支配・依存・敵対関係、共通の娯楽や趣味を通じた経験、経済的利益、社会的貢献・運動、革命など多くのものが挙げられる。登場人物間の交流とコミュニケーションはどのような機能や意

義を持ち、人間関係の構築に作用したのか。周囲（コミュニティや家族、社会、国家など）に対する影響や、当時の社会、あるいは作品世界における位置づけも考慮に入れて考察を深める。

A Tale of Two Cities における「怒り」と「癒し」のコミュニケーション

同志社大学 教授 玉井 史絵

本発表ではディケンズにおける階級間の情報と感情の伝達と共有に焦点を当て、コミュニケーションの果たす役割を探っていく。ディケンズやギャスケルといったヴィクトリア朝中期の作家たちは、貧しき者、虐げられし者への「共感」という感情の伝達を通じて、社会の分断を克服し社会を改革しようとした。しかし、彼らは同時に社会の安定を脅かしかねない労働者階級間での制御不能な情報と感情の伝達には強い恐怖や警戒心を抱いていた。

貧しき者、虐げられし者への共感と恐怖や警戒心といった矛盾する心理を解明する一助として、ディケンズがこうした労働者階級間の情報と感情の伝達をいかに描いたかを、フランス革命を題材とした小説 *A Tale of Two Cities* (1859) を中心に検討する。この作品では、パリとロンドンの間を登場人物が行き来し、伝言、暗号、手紙といった様々な媒体によって情報が伝達されることで、プロットが展開していく。また、フランスの民衆間での「怒り」と、イギリスのミドルクラスの人々の間の「癒し」という二つの対照的な感情の伝達が描かれている。こうした感情と情報の伝達を分析することにより、ディケンズにおける共感とその限界について考察する。

この作品に影響を与えたとされるインド大反乱 (1857) という歴史的コンテキストも踏まえ、労働者階級や異文化の人々といった「他者」のコミュニケーションに対する、ディケンズの複雑な感情を明らかにする。他のヴィクトリア朝作家たちの作品も視野に入れ、単なる作品分析に留まらない広がりのある内容としたい。

Wives and Daughters と *The Story of Elizabeth* における 女性人物のコミュニケーション不全とコミュニケーション

松山大学 教授 矢次 綾

本発表では、ギャスケルの *Wives and Daughters* (1864-66) と、サッカリーの長女で、1860年代から70年代にかけて人気作家だったアン・サッカリー・リッチーの *The Story of Elizabeth* (1863) を遡上に載せる。その理由は、どちらの作品にも、母と娘のコミュニケーション不全とそれがもてる問題が描かれているから、他の女性人物が娘とのコミュニケーションを通してその問題の解決に貢献しながら、自分自身の生き方や役割について思いを巡らせているからである。換言すれば、夫を亡くした後、若い男性に心惹かれながらも社会的地位のある別の男性と再婚し家庭に安住しようとする母 (*Wives* のハイアシンス・ギブソンと *Story* のキャロライン・ギルモア) に対し、娘

(*Wives*のシンシアと*Story*のエリザベス)は顧みられていないという苦い思いを抱き、その思いを母に伝えられないまま短絡的に行動してしまい問題を抱える。娘と交流し問題解決に貢献するのは、*Wives*のモリー・ギブソンと*Story*のミス・ダンピエである。シンシアの義妹モリーは問題に巻き込まれ醜聞的的となりながらも誠実な行動を心がけ、同時に自分自身の生き方を模索していく。母と娘の親戚筋にあたる年配の独身女性ミス・ダンピエはキャロラインに代わってエリザベスを庇護し、問題解決へと導いていくが、そうすることによって自分なりの役割を果たそうとしている。ギャスケルとリッチーは、女性の生き方が変化の兆しを見せ始めた時代の空気を敏感に感じ取りながら、以上の女性人物たちのコミュニケーション不全とコミュニケーションの様子、それらが及ぼす影響を描出したのではないだろうか。本発表ではこの点について吟味したい。

ヴィクトリア朝小説に見る“sisterhood”の希求と男性同士の “homosociality”について——*Far from the Madding Crowd*を中心に

名古屋学院大学 教授 西村 美保

結婚という制度を中心に社交が成り立ち、女性が男性の付随的立場にあったヴィクトリア朝社会では、女性同士の友情は将来の結婚生活を円滑に進めるための準備段階として捉えられるくらいで、そもそも関心が払われない対象だったと言われている。ましてや、階級を越えた女性同士の互助関係や互助精神、いわゆる“sisterhood”に対する社会の認識は低かったと思われる。それを反映するかのように、ヴィクトリア朝小説では、多様な形で、女性登場人物の孤独、女性同士の友情、互助関係が描かれるが、救済の願望はあっても成就しないことも多い。“Sisterhood”の理想的な姿が提示される場合もあれば、その欠落が浮き彫りにされる場合もある。いずれにせよ、こうした多様な表象の中に“sisterhood”の重要性とそれを希求する作家のメッセージを読み取ることができるのではないだろうか。本発表では、こうしたテーマに焦点を置き、複数のヴィクトリア朝小説、先行研究、そして文化的コンテクストを吟味する。特に 1874 年にコーンヒル誌に発表され人気を博したハーディの小説、*Far from the Madding Crowd* に関しては、“sisterhood”についてはもちろんのこと、“homosociality”についても考察したい。というのも、上記作品では、“sisterhood”の欠落した社会において、どのような立場であろうと、女性がいかに孤独と不安に苛まれる得るかが描写されるが、男性の場合は飲酒を介在とした“homosociality”が確立され、少なくとも表面的には安心感のあるコミュニティが提示されているからだ。それでいて、他のハーディ小説においても見られることだが、男性間の“homosociality”が女性の生活と運命に影響を与える様も見て取れる。

同性愛的欲望の共有と伝達——快樂と抵抗のレトリック

群馬大学 准教授 金田 仁秀

イギリスにおいて 16 世紀から男性間の性的行為を罪と規定してきたソドミー法による取締りは、18 世紀後半から急増し、19 世紀へと引き継がれた。1861 年には死刑が廃止されたものの、これに

よってそうした行為や欲望への抑圧が決して軽減されたわけではなかった。むしろ 1885 年には刑法改正によって、私的、公的空間を問わずに“any act of gross indecency”が取締りの対象となった。同性愛行為は常に処罰の対象であり、監視の下にあったのだ。しかしながら、このような状況の中で、19 世紀を通して同性愛的欲望が根絶させられたわけでも、またその表現がまったく不可能となったわけでもなかった。サブカルチャーは依然として存在したし、19 世紀後半にはヨーロッパ大陸を中心にいわゆる性科学も誕生し、同性愛擁護の声さえも聞かれ出した。また文学作品においても、古代ギリシャへの言及や比喻、美的昇華や異性愛との差異化といった方法で、同性愛的欲望は表された。さらには *Teleny* や *The Sins of the Cities of the Plain* といったより明白なポルノ小説も存在した。秘密の快楽は、それぞれのコンテクストに応じて、抑圧された故のレトリックを用いて共有されたのだ。本発表ではこうした歴史的、文化的状況を踏まえて、19 世紀後半の同性愛詩やポルノ小説等を取り上げながら、それらにおいて同性愛的欲望がどのように扱われ、伝達されたのかを考察したい。そして、それぞれのテキストにおける逸脱的快楽の位置を探りたい。

《第 1 回 19 世紀イギリス文学合同研究会 研究発表》

シャーロット・ブロンテの交流

——エレン、ギヤスケル宛の手紙を中心に——

静岡英和学院大学短期大学部 教授 芦澤 久江

シャーロット・ブロンテの残存している手紙のなかで、もっとも多いのは友人エレン・ナッシーに宛てたものである。このエレン宛の手紙は、ギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』の主要部分となっているが、エレンとの文通がシャーロットの成長に果たした役割はあまり指摘されていない。実はエレンとの文通は、シャーロットの精神修養に大きな影響を与えていると思われる。

ヴィクトリア朝時代において、女性同士の友情には特別な意味があった。結婚を人生のゴールとしていた当時、友情はどのように人を愛せばよいか、幸せな結婚へ導く練習の機会として、若い女性に奨励されていた。したがって、礼節、上品さを旨としたヴィクトリア朝時代にあって、女性が男性に対して禁じられていたあからさまな愛情表現を、女性の友人に対しては堂々とする事ができたのである。

一方作家として交流のあったギヤスケルへの手紙はどのようなものだったのだろうか。シャーロットは作家として、ギヤスケルを尊敬はしていたが、エレンに対するような愛情表現は見られない。したがって、エレン、ギヤスケル宛ての手紙を比較しながら、エレンとの友情がいかに特別なものであったのか、またそれがいかにヴィクトリア朝時代のイデオロギーに即したものであったかという事を明らかにしたい。

クリスティーは20世紀のディケンズか？

——田園殺人となりすましの主題

跡見学園女子大学 非常勤講師 梶山 秀雄

「ミステリの女王」アガサ・クリスティーが、幼少期に多くの文学作品に触れていたことはよく知られており、その中にはチャールズ・ディケンズの名前も含まれていた。とりわけ『荒涼館』（1852-53）を愛読しており、作家としてデビューした後は、登場人物関係の複雑さによって頓挫したものの、脚本化に着手したほどだったという。殺人事件をプロットの中心に据えた『バーナビー・ラッジ』（1841）をめぐっては、「探偵小説の始祖」エドガー・アラン・ポーが真相のトリックを看破して、ディケンズを驚かせたというエピソードも残っているように、ディケンズの作品群には遺作『エドウィン・ドルードの謎』（1870）は言うまでもなく、ミステリ的な要素が読み込み可能なものが少なくない。他方、ノーベル賞作家カズオ・イシグロは『私たちが孤児だった頃』（2000）で主人公を探偵に設定した動機として「1920年代のミステリ黄金時代の作品に惹かれた」と述べているが、それまで平和だった村で事件が起こり、颯爽と登場した探偵によって解決されるという図式は、クリスティーの作品、とりわけミス・マーブルシリーズに顕著である。本発表では長編『予告殺人』（1950）をテキストに、トリックの中核となる、なりすましの主題が、いかにディケンズからクリスティーに継承されたかを論考する。また、このテーマの現代的な意義と映像不可能性についても、アダプテーション理論の観点から考察してみたい。

共感と契約——トマス・ハーディ『森林地の人々』における 進化論のアイロニー

福岡大学 准教授 福原 俊平

トマス・ハーディの『森林地の人々』には進化論の影響が見られ、外部からやってきた登場人物が小さな共同体にもたらす変化の波紋が描かれている。プロットの大枠としては、自然選択によってジャイルズ・ウィンターボーンが淘汰され、共同体が文明化されるという進化論的な流れに沿っている。しかし、この小説においては、進化や文明化は道徳的な「向上」を意味していない。ハーディは進化という過程を自然界や宇宙の原理として認識していたものの、彼にとっての進化は進歩という垂直的な上昇ではなく、水平的なものであった。とりわけ、道徳という観点では、進化しているはずの人々の方が、道徳的に劣っているという逆転現象が生じている。本発表では、この小説における共感に基づく関係性と契約による関係性に注目して、ハーディ的進化論の逆説を分析する。ハーディが伝統的な森林地の人々を描く際に強調されるのは自然との共感であり、その共感はテレパシーのように村人たちの間にも通い合っている。それに対して、外部からやってきたエドレッド・フィッツピアーズのような人々は、金銭的契約を重視している様子が繰り返し描かれている。

本論では、『森林地の人々』において、進化の過程で共感が契約にとって代わられる様子を例証しながら、ハーディにおける道徳の逆説とアイロニーを分析していく。

モリスを代弁するワイルド —1882年北米講演ツアーに潜在するアーツ&クラフツ運動—

三重大学 准教授 関 良子

1882年の一年間をかけて行われたワイルドの北米講演ツアーの目的は、サヴォイ・オペラの一つ『ペイシャンス』(*Patience*, 1881)のアメリカ公演に際し、この喜劇が風刺の対象とする唯美主義の神髄を、アメリカの聴衆に説くことであった。サテンの膝丈ズボンに黒のシルクストッキング、銀のバックル付きの靴にレースの縁取りをしたヴェルヴェットのコートという出で立ちで登場したワイルドは、まさに唯美主義を具現化した存在として聴衆の前に現れ、約140回にのぼる講演をアメリカ及びカナダ各地で行った。

この北米講演ツアーは、文人ワイルドの地位を確立させた事象として広く知られているが、その講演内容が北米滞在中に変化していることに関しては、あまり研究的関心が寄せられていない。注目すべきは、当初は観念的、あるいはペイター的な唯美主義観を論じていたワイルドが、「芸術のための芸術」よりも、「生活の中の芸術」の重要性を訴えるアーツ&クラフツ運動の主張へと徐々に変化している点である。講演原稿の中には“Have nothing in your house that is not useful or beautiful.”という、モリスが1880年にイギリスで行った講演「生活の美」(“The Beauty of Life”)の中での主張からの、明らかなエコーすら見られる。本発表では、ワイルドの北米講演ツアーの間に起きた主張の変化に注目する。その過程で、「芸術のための芸術」と「生活の中の芸術」の間の接合面を精査することが本発表の狙いである。

《内外ニュース》

会員の訃報：2023年3月9日に豊永彰先生（関西大学名誉教授）がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

《編集後記》

協会ニュース第94号をお届けします。冒頭の写真は、昨年7月末に撮影したドーセットのSt Michael's Churchです。この教会を訪れる少し前、イギリスを熱波が襲い、史上初めて40度を超えました。この日は例年のような涼しさを取り戻していたのですが、周りの草原はそれまでの暑さのためすでに枯れ始めていました。

ハーディの死の前後、親族や友人達の間で、彼を故郷の教会に葬るべきか、それとも（おそらく彼の生前の願いに反して）チョーサーやディケンズといった名だたるイングランドの文人達が

眠る Westminster Abbey に葬るべきかが話し合われました。その結果、ハーディは両方に葬られることになりました。St Michael's Church には、ハーディの心臓が埋葬されました。一方、医師により心臓を取り出された彼の遺体は、火葬され、Westminster Abbey の Poets' Corner に葬られました。この二つの墓の存在は、「埋葬か火葬か」も含めて、親族・友人達の相容れない様々な思惑の調停の結果だと言えるでしょう。

今年日本ハーディ協会が、隔年で開催される 19 世紀イギリス文学合同研究会のホストに当たっています。ホストの年は、一種のアーカイブとして、合同研究会の情報も協会ニュースに含めたいという金子会長の意向により、今号では、11 月 4 日（土）に開催される、第 66 回日本ハーディ協会大会（午前）と第 1 回 19 世紀イギリス文学合同研究会（午後）の発表要旨を掲載しております。

今号も充実した内容の記事をたくさんお寄せ頂きました。ご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。次号は 2024 年 4 月発行予定で、投稿の締め切りは 2024 年 2 月 20 日です。論文、随筆は 2,000 字程度、短信、個人消息は 500 字程度です。どうぞ皆さま、奮ってご投稿ください。（編集者の責任で内容を編集する場合があります。また、編集者と会長の判断で掲載できない場合があります。あらかじめご了承ください。写真を付ける場合は、被写体となった人物や撮影者等の掲載許可を得てからご投稿ください。著作権のある図版等については、あらかじめ掲載許諾の処理を済ませてからご投稿ください。）ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。

日本ハーディ協会ニュース 第 94 号

HP 公開日 2023 年 9 月 1 日

編集者 金谷 益道
